

# 十周年記念号発行にあたって

理事長 長崎 明

早いもので、本研究所が発足して満十年が過ぎました。十年前の教育環境と現在とをくらべると、その変化の大きさ、速さからして、やっぱり一昔たったこの実感があります。一方、研究所の財政が火の車なのと、会員拡大に追われているのは十年一日のごとです。何といっても会員制の民間研究所で、とりたてて財源も資産もない状態での発足でした。そのうえ、事務局員（現在の所員）も現役を

離れた元先生によって構成され、現場の先生方や教職員組合から若干の距離がありましたので、とても三年は持つまいとの巷の声が入り、いささか心細い思いをしたのが、つい先だつてのように思い起こされます。金も物もない状態ながら心意気だけは盛んで、それこそが今日を迎えることができた一番の原動力といえましょう。

県民教育研究所の発足には、若干の前

史がありました。ご記憶の方も多いと存じますが、一九七九年は国連が「児童の権利宣言」を採択して二十周年にあたる

「国際児童年」でした。その年の九月、

本県で初めて「新潟の子どもの現実と教育・環境を語るシンポジウム」が開かれ、百数十名が集まりました。それを機会に「新潟教育懇話会」を結成し、「今、教育の現場で」と題する論文集を出しました。この「ふれあい」を大切にしようということ、八四年に本会を結成したのです。したがって、本会が今日に至るまで、前史を含めれば、十五カ年を要したわけです。今さらのように、あの十五年前のシンポジウムの熱気を思い出します。あの熱気は、県内の現場で子どもと共に日々を過ごしている保育所、小、中、高、大学の先生方や医師、弁護士、さらに父母の皆さんによって醸し出されたものでした。「初心忘るべからず」を motto に幅広い皆さんと手をつなぎ、本県

における教育研究のセンターとして、いっそうの研鑽に励むことを誓いあいいたい存じます。

「新潟の教育情報」と「研究所通信」は研究所の大切な業務です。とりわけ「教育情報」は研究所と会員を結ぶ絆です。その四十号がびったり十周年に発行されるのは、この種の機関誌として稀有のことと自画自賛が許されると思います。その内容もしだいに質的向上を遂げてきたと信じます。高質の内容をできるだけ読みやすく表現するという点でも改善のあとが見受けられます。これもひとえに会員、非会員の読者のご支援と、執筆者、編集者のご努力あってのことと厚く御礼申し上げます。

新たな十年をより成果あるものにするため、今後とも多くの皆さんの率直なご批判と深甚なお力添えを賜りたく、心からお願い申し上げます。